

実例で説明する中国語文法指導テクニックの応用

— “就” と “才” を例にして—

Application of Chinese grammar teaching technique explained with
examples: Using “*jiu*” and “*cai*”

畢文涛 王天予

Bi Wentao Wang Tianyu

提要 本論文以初級漢語學習者為教學對象，對北京語言大學東京校自 2015 年至今採用的直接法任務型授課法進行報告。以很多日本初級學習者困惑的時間副詞“就”和“才”為例，在總結日本學習者偏誤的基礎上，從語意、語法規則和使用場合三個教學板塊，探討避免出現偏誤、引導學習者正確理解的有效教學方法。此外，通過北京語言大學本校的示範課和東京校的實踐對比，總結日本學生的特點，並針對他們提出有效的教學方法。

キーワード：“就”、“才”、中國語、文法指導、實例

目次

1. はじめに
2. 研究目的と意義
3. 「北京語言大學」モデル授業についての紹介
4. 日本人學習者を対象にした実践
5. まとめと今後の課題

1. はじめに

日本の大学における外国語學習者を見ると、英語の次は中国語の學習者が一番多いと言われる、中国語學習がブームと言えるこの十数年、學習側の状況は以前より大きく変化してきた。第二外国語として選択する履修者が増えるほか、専攻として中国語学科を設ける大学も増えてきたと見られる。それを背景に、中国語教育の先鋒と言われた北京語言大學は 2015 年に東京校を設立した。本校から継承してきた直接教授法に従い、日本人學習者向けの指導法に重点を置いている教育機関でもあり、研究機関でもある。数多くの教育者から、多様な教授テクニックはどこにどうやって使うかなどについて、具体的な応用手法を研究すべきだとい

う声が聞こえてきた。そこで、我々は教育現場に立っている指導者として、ノウハウの共有と検討がとても有意義なことだと考えている。

2. 研究目的と意義

張（2007）は、日本の三大学に在籍している計 372 名の初級中国語学習者に実施したアンケートによって、「中国語の授業で学生を一番悩ませるのは文法である。」と「学生の中国語の授業に対する一番大きな不満は教師の説明が分かりにくいということである。」と述べている。また、日本の「大学教養中国語教育におけるさまざまな問題のもとで、初級段階での課題は、何を教えるかよりも、どのように教えるかということである。」とも指摘されている。本稿は教育現場の立場において、多くの初級日本人学習者が戸惑う時間副詞“就”と“才”を具体例にして、「どのように教えるか」の検討を目的とする。

中国語の“就”と“才”は、複雑なルールを持ち、初級段階で習得されにくい言語項目の一つであると言える。

刘爱群（2015）は、初級レベルの 296 名日本人大学生を対象に、“就”と“才”が導入された直後に、習得状況の調査を行った結果について、“就”と“才”の誤用、脱落、語順の違いなどに多くの問題が存在していると述べている。

劉羈（2016）は、日本の大学における中国語専攻の学生に“就”と“才”の習得状況について調査した結果、「“就”と“才”の誤用の原因として、主に各用法の理解が不十分である」と述べている。また、日本語からの影響が著しいと示したうえ、文法指導において「インプット仮説」を軽く言及したが、実践と検証が必要とも指摘している。

本稿では、北京語言大学東京校で実施した初級中国語学習者を対象とした“就”と“才”の文法授業における、直接法任務型授業の試みについて報告する。また、学習者の誤用した要因をまとめた上、語意、構文規則と使用場面の三つの教学プレートで、誤解を避け、正解に導く有効的且つ効率的な教え方を検討する。さらに北京語言大学本校のモデル授業と東京校における実践との対照を通して、日本人学習者の特徴を明らかにし、それに応じる有効な文法指導法を提案する。

3. 「北京語言大学」モデル授業についての紹介

本稿のモデルとなる北京語言大学は、50 年間に渡って、世界 170 余りの国と地域から来た外国人約 15 万人に対して中国語教育を施すことができた。母語背景のまったく異なる学習者に対して、媒介語を使用しない「直接法」を総轄的な方法論として用いる。更に、成人学習者の論理上の強みを生かした認知法などのアプローチを参考にし、同じく言語習慣の養成と実用性を重視した聴説法、視聴法、交際法、功能法などの長所を吸収した「発展した直接法」と言えよう。

北京語言大学本校における中国語教育は「漢語総合」という授業を中心に展開する。名の通りに、「聞く」「話す」「読む」「書く」の四つの技能はすべて鍛える総合的な指導時間となっている。1コマ50分、3～4コマで“一課”を完成させる。

一コマの流れとしては、宿題チェック——書き取り（単語）——重点となる単語の説明——練習——文法説明——練習——本文（発音チェック）——内容理解——話題展開（実演）——交際任務——宿題（復習、文化理解、補足単語など）となっている。どこでもある一般的なパターンだと思われるが、中介言語は一切使わないため、指導効果は指導方法とテクニック次第であると言えるだろう。

教材としては、初級には《尔雅中文》シリーズの《初級汉语综合教程》上冊1、上冊2、下冊1、下冊2がある。教育対象は単語量300～500に達している中国語専攻本科一年生である。本科の授業時間数は300時間となり、一年生達成するレベルは新HSK4級～5級である。詳細については、教科書の“编写说明”をご参考にいただき、ここでは割愛する。

4. 日本人学習者を対象にした実践

東京校は北京本校の教育対象と最も大きな違いは、学習者が共通語を持つことである。異なる母語背景を持つ学習者に教えるのと最も違うと感じるのは、母語影響の傾向が著しく見られることである。

東京校のカリキュラムの編成は基本的に北京本校と一致しているが、学期と時間割だけは日本の大学に合わせるため、東京校独自の制度となり、1コマ90分、週5コマ（祝祭日を除く）。指導時間年間300時間である。

本稿の実例となった学習者は、2019年4月に入門レベルで中国語専攻に入学し、男子学生8人と女子学生14人、計22人のうち、20人が18歳～19歳であるが、2人（女子）が20代である。本研究の文法項目となった“就”と“才”を導入した期間は2019年6月18日～19日である。

4.1 実施した授業の工夫

使用する教科書と授業の流れは北京本校と統一されているが、学生の特徴に合わせ、適合性のある工夫と注意点を上げる。指導者は知識を教えるだけではなく、学習者に良い勉強法を導くことも任務の一つである。

(1) 予習について、予習は必ず実施するように要求している。

日本人学生は漢字に比較的慣れているので、予習することで、授業の効率を大幅に高めることができる。

(2) 語彙について、重点における単語は母語の影響があることを意識して選出、共起する言葉を強調する。

(3) 文法について、取り上げる例文は、学習者の日常を意識して編集する。

教科書の例文や会話文は北京における留学生の生活場면을素材にして作られているが、母国における学習者はイメージするしかなく、理解が難しくなる。習得した表現と現実の環境につながる機会が少なくなると、目標言語に反応する意欲が落ちていくので、学習者の日常に近い情景を取り上げるのはとても重要だと考える。

(4) 本文について、本文理解には聞く練習を優先する。

語彙と文法の説明が済んだ後に、本文を初めて聞かせるのが筆者の方法である。いくつかの設問で理解状況が把握できる。内容をまとめることを通して会話練習にもなる。多様な練習形式により、四技能の練習を成し遂げる。

(5) 宿題について、通常練習のほか、予習作文を自己チェックし、修正跡をつけた原文を提出することを要求する。

自分の間違えを自分で直せることで初めて「習得できた」と言えるだろう。こういったフォロー作業を通して、授業の効果が反映される。

4.2 文法指導の技法——“就”と“才”を例にして

外国語教授法としての直接法に対して、「帰納的な文法指導が必ずしも効果的だとは言えないこと、読むこと・書くことの領域がおろそかになりがちであること等が問題点として取り上げられた。」「また、教え方が難しいということもある。……抽象的なものについては学習者がその意味内容を想起できるような誘導が必要となる。このことは、微妙な点について学習者が本当に理解しているかどうかの確認が難しいことも意味する」(國弘 2015)、のような評価と疑問はよく見られている。実際は、指導技法により、指導効果は大きく影響されると考える。本稿では、初級中国語文法の“就”と“才”を教える実例を通して、効果のある指導方法を検証する。

4.2.1 “就”と“才”の意味

《現代汉语词典》(第七版)では、“就”と“才”はそれぞれ多くの意味を持っているが、初級中国語学習者にとっては、対としての意味を習得するのが一般的である。その要点を以下のようにまとめる。

品詞性：二つとも副詞である

意味と使い方：

(1) 時間詞又は数量詞+“就”+V.

(動作の発生が早い、時間が短い、容易に実現できることを表す。)

例：我今天早上 5 点就起床了。

(2) 時間詞又は数量詞+“才”+V.

(動作の発生が遅い、時間が長い、容易に実現できないことを表す。)

例：我昨天晚上 12 点才睡觉。

(3) “才”+数量詞又は数量詞を含む短文

(数量が少ない、回数が少ない、時間が早いことを強調する。)

例：現在才7点，离上课还早呢。 / 每次都来十多个人，这次才来了3个人。

便宜のため、以下は意味1、意味2、意味3と呼ぶ。

4.2.2 予習作文の分析

授業前日に、宿題として、提示する動詞と時間を使い、教科書の説明を見てから作文をさせた。以下は現れた誤用例を取り上げる。

- a. 昨天晚上12点半我才睡觉了。
- b. 我就今天早上5点起床了。
- c. 才昨天晚上12点半我睡觉了。
- d. 昨天晚上才12点半我睡觉了。

誤用 a は、“才”の後ろに来る動詞に“了”をつけた。日本語では、過去に完了した動作には「た」を付けるからである。“睡觉”は昨日の動作だから、“了”をつけたと考えられる。しかし、意味2を表す“才”は、直後に来る動詞に“了”を付けないことが誤りである。

誤用 b は、完全に言わない文ではない。「ただ…だけ」の意味として、いつものことではなく、「今日だけ」を強調するには、正しい文となるが、意味1の“就”の使い方として、誤用となる。“就”の位置が間違っている。“就”は時間副詞であり、動詞の前に入れるべきである。

誤用 c と誤用 d は、a と同じく“了”の位置付けのほか、“才”の位置付けでもある。“才”と“就”とともに、主語の後ろ、動詞の前に入れるべきである。誤用 b と同じく、時間を強調しようとする考えで、時間名詞の前に入れたと推測できる。又、意味3の“才”として、時間名詞の前に入れることができるが、すべての時間名詞の一番前ではなく、強調する時刻の前ではなければならない。そのうえ、その時刻に発生する動作の前に“就”を入れるのも要求される。つまり、文法的に正しい文に直すと、“昨天晚上才12点半我就睡觉了。”或いは、“昨天晚上12点半我才睡觉”となる。

以上、指導する際に注意点は、①“了”の付けかたと、②“就”と“才”の位置、③“才”の意味2と意味3の使い分け、の三つに置く必要があると分かった。便宜のため、以下は注意点1、注意点2、注意点3と呼ぶ。

4.2.3 指導例

直接法で中国語文法を指導するときに使える技法において、対比法、举例法、等式法、置換法、情景法、演出法、イラスト法、発見法、類推法などがよく使われている。“就”と“才”の場合、正反対の意味を持つため、「情景法」と「対比法」から導入するのを薦める。

以下は意味の導入を意図して、五つの「情景」と一つの「比較」をデザインする。

情景 1：授業が始まる時間と学生同士の来た時間を比べる。

導入例：我们9点上课。

8点，田中来了。(早? 晚?) → 田中8点就来了。

9点，山本来了。(早? 晚?) → 山本9点才来。



情景 2：普段列車のチケットを買うことと春節に列車チケットを買う時間を比べる。

導入例：平时，在火车站买票，排10分钟。(快? 慢?) → 平时等10分钟就买到了。

春节前，在火车站买票，排2个小时。(快? 慢?) → 春节前等2个小时才买到。



情景 3：単語の覚える時間を比べる。

導入例：记住5个生词用多长时间？30个呢？

记住5个生词，只要一会儿。(容易? 困难?) → 5个生词一会儿就能记住。

记住30个生词，要很长时间。(容易? 困难?) → 30个生词要很长时间才能记住。

情景 4：免許を取ることを比べる

導入例：谁有驾照？考了几次？

A 考了一次，合格了。(顺利? 不顺利?) → A 考了一次就合格了。

B 考了三次，合格了。(顺利? 不顺利?) → B 考了三次才合格。

帰納する：

- ・ 時間詞又は数量詞+ “就” +V.

表示动作的发生或目的的实现比较早，快，容易或顺利等。(意味1)

- ・ 時間詞又は数量詞+ “才” +V.

表示动作的发生或目的的实现比较晚，慢，不容易，不顺利等。(意味2)

・一般来说,已经发生的动作和经常反复发生或有规律性的动作用“就+V+了”“才+V”;未来将要发生的动作“就+V”“才+V”;表示需要或可能实现的动作“就+能愿动词+V”“才+能愿动词+V”。(注意点1と注意点2の提示)

例: 山本今天8点就来了。田中今天9点才来。

山本每天8点就来了。田中常常9点才来。

明天的会议下午才开始。我们明天8点就出发,上午就能到。

5个生词一会就记住了,30个生词要两个小时才能记住。

情景5:现在才8点,田中就来了。(来的时间早?来的时间晚?)

才5个生词,一会儿就记住了。(记的生词多?记的生词少?)

这个孩子才三岁就认识这么多字了。(年龄大?年龄小?)

帰納する:才+时间名词/时量词/数量词/动量词,强调时间早、短,数量少、小等,后面如果有动词句常常是“就+V+了”句式。(意味3と注意点3の提示)

比較:我们9点上课。现在已经8点55了,才来了1个人。(应该来得更多)

今天才学了5个生词。(平时学的更多)

我才学了三个月的汉语。(不会达到很高的水平)

帰納する:主语+才+含有时量词/数量词/动量词的动词小句,表示动作的发生比预想的时间短、动作量少、作用力小等。这个用法也可以用“就”替换。(意味3と注意点3の提示)

注:時量詞/数量詞/動量詞を含む動詞文の「了」の位置について、習得済みである。

以上、“就”と“才”についての説明である。

続いて、応用の練習に進める。劉と古川(2013)では、文法の練習方法としては、以上の導入方法は勿論、ほかにも多様な方法を紹介している。例えば「文型の変換」「書き換え」「絵を見て話す」「質問と答えの練習」「誤った文の訂正」「文を完成させる」などあるが、筆者は練習目的と時間によって、適切な方法を使えばよいであろうと考える。“就”と“才”の練習は、機械的に「時間詞/数量詞/動量詞と動詞の間」という位置の把握を要求されるだけではなく、文全体のニュアンスの理解も要求されると望ましい。本稿では、学生の予習作文を参考して、以下のような練習を提案する。

(1) 適切な位置に入れる練習

例:A今天早上B我C九点D到E教室。(才) 正解:D

A老师的话B我C听D一遍E懂了。(就) 正解:E

(2) 語順を並べる

例：今天的生词，我，就，写了一遍，了，记住

正解：今天的生词我写了一遍就记住了。/我写了一遍就记住了今天的生词。

今天的生词，我，才，写了十遍，记住

正解：今天的生词我写了十遍才记住。/我写了十遍才记住今天的生词。

(3) 穴埋め練習

这孩子___三岁___会说成语。

正解：这孩子才三岁就会说成语。

这孩子三岁___会说话。

正解：这孩子三岁才会说话。

4.3 効果と反省

授業後、学生の自己修正文を確認した結果、全員正解になった。指導の必要性和有効性を検証できたと言えるであろう。また、誤用に導きやすい説明例を以下のように取り上げる。

(1) 「時間詞」を用いて説明する。

「時間詞」には「時間名詞」「時間量詞」「時間副詞」に分けられる。“就”と“才”の場合、単なる「時間詞」を用いて導入するのは不十分であり、時間詞と共起するときに、位置付けにより意味が変わることを無視すると、誤用になる要因となる。

(2) 「時間詞」との共起を強調する一方、「数量詞」「動量詞」を無視する。

「時間詞」との共起は、最も“就”と“才”の対立した意味を表すが、「数量詞」「動量詞」との共起は“就”と“才”の意味分けを系統的に説明するには必要である。

(3) “就”と“才”は同時に現れる例文を示さない。

勿論、最初に意味を明確するには、“就”と“才”を同時に入れる例文を避けるのは確実に良いが、日常会話では、セットとして現れ、重なる強調の使い方としても普通であるため、単独でしか現れないイメージを学習者に与えないよう、同時に使う例文を提示するのは必要である。また、片方のみ現れる例文のみ挙げると、意味の判断はすぐできる一方、語順と共起語についての注目は薄くなりがちと考えられる。

(4) すべての意味を説明しようとする。

前文で述べたように、“就”と“才”はそれぞれ多くの意味を持つ多義語であるが、それぞれの意味を教える授業ではなく、対になる場合を教える授業となるため、主題に関連のある用法に絞ったほうがよいであろう。ほかの多義語についても、沢山の意味を同じ段階で進めるのがいいとは思わない。本文に出る意味と用法のみ指導すれば十分であろう。

5. まとめと今後の課題

本稿では、北京語言大学東京校で実施した日本人学習者を対象とした文法指導における直接法授業の実践について報告した。そして、指導効果と受講者の習得状況を基に本実践の課題について考察した。

多くの初級日本人学習者が戸惑う時間副詞“就”と“才”を具体例にして、本稿は日本人学習者の誤用の特徴を分析した上、それに応じる有効的な指導技法を検討した。また、意味、構文規則と使用場面の三つの教学プレートで、誤解を避け、正解に導く教え方を提案した。

本稿の最終目標は日本における最適な大学中国語教授法を定めるということを目指して、教育者の養成とスキルアップのほか、重要な参考資料として教材への反省、指導効果の量り方を検討することにも貢献したい。

参考文献

日本語

- 王志英 (2005) 「大学における初級中国語の教授法について」 沖縄大学人文学部紀要 6 : 53-64.
- 勝川裕子 (2017) 「初級中国語授業における TPR の実践」 『ことばの科学』 (31)、名古屋大学言語文化研究会 : 93-110.
- 國弘保明 (2015) 「語学教育に於ける文法翻訳法と直接法」 『日本橋学館大学紀要』 14 (0) : 37-45.
- 杉田欣二・その他 (2013) 「北京語言大学における対外国人中国語教授法のノウハウ」 『言語と言語教育—アジア太平洋の声 ポリグロシヤ』 (24)、立命館アジア太平洋研究センター : 178-189.
- 周建中 (2015) 「達成感と、自信・興味・意欲の向上を重視した中国語授業の試み：私の拼音スリーステップ教授法と中日双方向通訳・会話式指導法」 『東京成徳大学研究紀要』 (22) : 159-164.
- 劉愛群 (2015) 「“才”和“就”的习得情况考察」 (「才」と「就」の習得に関する考察—誤用分析の観点から) 『メディア・コミュニケーション研究』 第68号 : 79-93.
- 劉羈 (2016) 「日语母语使用者汉语副词“就”和“才”的习得研究」 『人文学研究所報』 (神奈川大学人文学研究所) No. 56 : 25-34.
- 趙菁 (2015) 「アクティブ・ラーニングの実践における反転的授業の試み：初級中国語会話授業の授業デザイン・授業報告」 金沢大学外国語教育論集 (9)、外国語教育フォーラム : 33-39.
- 張軼欧 (2007) 「第二外国語としての中国語の初級教育に於ける問題と対策」 『関西大学外国語教育フォーラム』 (6) : 69-82.
- 張立波 (2008) 「大学の第二外国語教育課程としての初習中国語教授法に関する試み—相原茂等著『一年生のころ』第六課を中心に」 『東北大学高等教育開発推進センター紀要』 (3) : 301-306.

張璐 (2012) 「初級中国語における教授法の探索 (東アジアの歴史・文化・言語(3))」『福岡大学
研究部論集』A、人文科学編 12(3) : 11-20.

松田春奈 (2015) 「日本人中国語学習者の誤用とその教授法・中国語の教科書の問題点について：
可能・可能性を表す助動詞“能”と“会”を中心に」『名桜大学紀要』(20) : 15-28.

中国語

吕文华 (1994) 《对外汉语教学与法探索》 语文出版社

陈立民 (2005) 〈也说“就”和“才”〉《当代语言学》第7卷第1期 高等教育出版社:16-34.

杨德峰 (2008) 《日本人学汉语常见语法错误释疑》 商务印书馆.

刘富华/古川裕 (2013) 《对日汉语语法教学法:怎样教日本人汉语语法》北京语言大学出版社.

徐子亮 / 吴仁甫 (2013) 《实用对外汉语教学法》(第3版) 北京大学出版社.

中国社会科学院语言研究所词典编辑室 (编) (2016) 《现代汉语词典》第7版 商务印书馆.